

令和4年度一般入試個別学力検査【後期日程】「国語」 採点・評価基準

Ⅰ（配点 135 点）出典：中島敦「かめれおん日記」

問題本文は、作品の全六章のうちの第二章のほぼ全文である。生徒からもらったカメレオンを動物園へ預けるまでの数日間のことが描かれるが、中心となるのは、カメレオンよりも「私」の心象である。

中島敦は「山月記」の作者。この作品でも、「私」の屈折を含んだ心情を理解して読解することが求められるが、結論を急いだ表面的な読みも見られた。登場人物を理解するための丁寧な読解が求められる。

また、解答の仕方として、多く書き込み過ぎて、意味が取りにくくなっているものもあった。本当に大切な点はどこなのかを見極めて解答するようにしてほしい。そのためには、本文をしっかり読むことが肝要だ。

問一 A 蹴 B 丹念 C 風貌 D 繰 E 撲滅

C「フウボウ」に間違いが多かった。特に、「ボウ」の偏に、余計な点画があるなどの間違いが目立った。D、Eも偏の間違いが見られた。画数の多い漢字や部首の形が似ているものなど、一点一画をおろそかにせず、日ごろから注意深く学習してほしい。

問二 ① よし ② あいせき（「あいじゃく」も可） ③ きかつ ④ へだ
⑤ さまた

①「由」が読めていない。「ゆえ」という誤答が多かった。③は「こかつ」という誤答が複数あった。読み方があやふやな字をそのままやりすごさず、その都度調べて覚えてほしい。

問三 この設問は「吉田」の人物像を問う問題である。「精力絶倫で思い切り実用向きで、恥も外聞もなく物質的で、懷疑、羞恥、「てれる」などという気持と縁の遠い人間」でなければできない振舞いを挙げてもらいたい。

問四 「潑刺たる高等小学生」と「影の薄い大学生」という対比を踏まえて、「私」が「影の薄い大学生」をどう考えているかを説明する問題。「高等小学生はよく働き役に立つ一方、大学生は働かなくて役に立たないと捉えている」という主旨の解答が多く見られたが、働きの有無で評価するところに重点があるわけではない。

問五 吉田の話聞いた後、「私」が「余り愉快ではない気持」になった理由を説明する問題。「一時間」もの長話を聞かされたことや、同僚の秘密という話題が嫌だった、とい

う解答が多数にのぼったが、嫌な話を長時間聞かされて不愉快になるというのは一般的な反応である。ここでは、「私」が吉田と自分を比べて、どのように感じたか、という点に着目して解答してもらいたい。あまりできていなかった。

問六 傍線部の内容を説明する問題。傍線部の中の「それ」という指示語が指すものが何かを明らかにし、「知的装飾」という言葉の意味するところを説明することが求められる。「知的装飾」の説明がなされていない答案が多くあった。「自分だけが特別な能力を持っていると感じていた」というような解答が複数あったが、他者との違いを特別な能力と感じていたのだとしたら、それを「知的装飾」と表現するところにどのような意識があるのか考えてみてほしい。

問七 「黄金なす緑色」がどういうことを象徴しているかを説明する問題。前後の部分を読めば「黄金なす緑色」が肯定的なものだということは理解できよう。ほとんどの答案でその点は触れられていたが、それだけでは不十分。傍線箇所の段落を読むと、「概念」「灰色」/「感覚」「黄金なす緑色」の対の関係を認めることができるが、「感覚」と「黄金なす緑色」がなぜ結びつくのか。似たような配色のものがある。高等学校時代の教科書だったゲーテの「詩と真実」の表紙だ。「黄金なす緑色」が、感覚や感受性にあふれていた青春時代と切り離せない色だということを踏まえて考えることが望まれる。

問八 (a)「成功」とはどういうことかを答える問題。どういうことをどのように完遂したのか、前の段落の内容を手がかりにすれば答えられる。

(b) (a)で答えた「成功」を「これ以上完全な輝かしい成功があろうか」と述べるところに込められた心情を答える問題。多くの答案で、「成功」が文字通りの「成功」ではなく「皮肉」な結果であることを示そうとしているということは書かれていたが、「皮肉」だけで終わらず、直前の段落にあるように、「私」はこの結果を自分で招いているという点を踏まえて、「私」の心情をもう一步深く考えてみてほしい。

Ⅱ (配点 90 点) 出典：『和歌威徳物語』

出典名に「和歌威徳」とあるように、優れた和歌には現実を変改するような特殊な力のあることを示す、いわゆる歌徳説話の類である。出題箇所は二つの説話からなる。各説話において、和歌がどのような状況で詠まれ、和歌がどのように優れていて、そして、その和歌の力によって状況がどのように変わったか、を押さえることがポイントである。

問一 語句の現代語訳。a「賞美なさった」、b「献上せよ」、c「(小式部が)時流に乗って栄えた」、と基本的な単語ばかりなので、おおむね良くできていた。cについては、単語の意味は捉えられているのに、主語を取り違えているものが目立った。

問二 母和泉式部、娘小式部、院という登場人物を把握し、母和泉式部が院に、「私ではなく、娘の小式部に歌を詠ませて御覧になるのがよいでしょう」と進言していることを整理できていればできる問題。「御覧あるべし」の敬語をきちんと訳出できていない場合、点数に差がついた。

問三 設問では特に「これは」の「これ」の指示内容を問うているので、そのことがわかるように「波に浮いている鳥を北面の武士達が弓で射ようとねらっている様子は」というような書き方をするのがよい。また、「こそ～已然形」で文が終止せずにつづく、逆接の句法であることにも注意が必要で、「神に関わる事には「ちはやぶる」と申すのがよいでしょうが」というように訳出してほしい。「解釈せよ」とあるからと言って、文法的に不正確な解釈をしては正答にはならない。

問四 A歌が掛詞という修辞技法を用いることが注に説明されているせいか、それを抜き出しただけの解答が多かった。文脈からここで何が話の焦点になっているのかを把握し、それを踏まえた解答にすることが大事。一見、場違いに思える「ちはやぶる」という語で始まりながら、最後まで読むと、住吉という場にも、鳥を射る場面にも、即した内容になっているところを押さえる。

問五 母和泉式部の娘小式部に対する心情を問う問題。小式部が和歌を詠む前——期待をこめて推薦し、初句を詠み出した時点——失敗するのではないかとほらはらし、そして歌一首を詠み終えて賞賛を受けたとき——安堵し、母として誇らしく思う、というように何点かに分けて心情の変化を解答する。「詳しく説明せよ」とはあるが、話の内容をだらだらと追って書くのは点数につながらない。

問六 ここから二つ目の話についての設問。登場人物を把握し、その関係を整理できていればできる問題。「簡潔に」という指示があるから、「小式部内侍が・君から・祈りの和歌を詠む事を」という三点にしばって必要な事のみ書いてほしい。

問七 B歌の解釈が、本問題の中では最も難しかった。まず、上二句と下三句が倒置になっていることを押さえて、文として頭の中で組み立て直すことが必要である。適当に訳して感覚でなんとなく意味をつなぐと、わからなくなる。また、下三句についても「～を～に譲る」の「を」と「に」に注意して、「小松が、長寿を、君に、譲ると思うと」と詠んでいることを正確に捉えてほしい。和歌の解釈だからと言って感覚で解いてはいけなない。まずは、いわゆるテニヲハ——格関係をきちんと押さえることが基本である。

問八 B 歌によって、枯れた松がたちまちに再生するという奇跡が起こった、ということ。おおむねよく出来ていた。「時の間に」の意味を取り違えている場合、減点の対象となる。

Ⅲ (配点 75 点) 出典：〔宋〕王銍『默記』

北宋の真宗の死後、皇太后として幼い仁宗に代わって垂簾聴政（女性による摂政）を行った章献太后に関する逸話である。「智聡 人に過ぐ」章献太后の台詞と、その話を真に受けた大臣たちの行動を読み取ってほしい。概要は以下のとおり。章献太后は、宰相や執政などの大臣たちの親戚や姻戚にも恩賞を与えるという名目でその姓名を入手し、いざ人事案を決裁する段になると彼らの一族かどうかを確認し、彼らの親族や親戚であれば任用を見送った。

問一 基本的な読みを問うた。a「かくのごとし」 b「ここにおいて」。a はよくできていたが、b については、「于」が「於」に同じであることを認識していない解答もあった。

問二 書き下しの問題。正答は「宰執の同心の協力非ずんば、何を以てか此に至らん」。「非ずんば」は、「非ざれば」でも可。「同心の協力」は「心を同じくして協力するに」でも可。上は否定の仮定条件、下は反語表現の書き下しになっているかどうかのポイント。

問三 現代語訳の問題。「皇帝の一族や外戚たちはすでに昇任するなどの恩恵を得ているが、宰相や執政の親戚だけには恩賞が及んでいない。」という方向で解答してあれば可。解答の中に「皇帝」を「天皇」、「皇族」を「天皇家」と混同しているものがあつた。

問四 内容把握の問題。「子孫や親族たちの姓名を書いた名簿を章献太后に上呈した。」という方向で書いてあれば可。解答の中に「奏聞（上奏の意）」の意味を取り違えているものがあつた。

問五 指示語が何を指すか確認する問題。①「宰相や執政の親族の姓名（を書いた名簿）」 ②「宰相や執政の親族関係を示す系図」。いずれも正答率は高かった。

問六 解釈の問題。「除」は除官、任官のことだが、注を確認せずに「除く」ことだと早合点した解答もあつた。この文でやや難しいのは「方」の解釈である。伝統的に「まさ（に）」と訓じるが、意味は「～してはじめて（ようやく）」である。「大臣からの人事

案の上奏があると、章献太后はまず宰相や執政の親族関係を示す系図をみて、推薦された候補者がかれらの親戚でないことを確認してから、ようやく任官した。」という方向で書いてあれば可。

問七 全体の内容把握の問題。「宰相や執政たち大臣の親族や姻戚関係を把握し、任官の際に彼らの一族に権力が集中することを避け（、皇帝を頂点とする中央集権を徹底させようとする）るねらい。」という方向で書いてあれば可。なお、（ ）内は世界史の知識が必要なので、書かれてなくとも良しとした。なお、解答の中に「有能な人材を登用するため」というものがあつた。大臣らの一族を排除した結果として、そのようなことがなかったとはいひ切れないが、『黙記』のこの段から直接有能な人材を選抜したことは読み取れないため、減点した。